

## マレーシア出張報告

原 不二夫

出張先：シンガポール，マレーシア

期間：2011年8月23日～31日

マレーシアの政治家、実業家の李孝式 (Tun Sir Lee Hau Shik, 1901?～1988) に関するシンガポール東南アジア研究所 (ISEAS) の研究会「H. S Lee: The Man and His Time Conference」は、当初8月に予定されていたが、一旦11月に延期され、さらに12年3月に延期されることになった。当初は研究会出席のための出張という位置付けだったのだが、関係者との協議、新たな関連資料収集に目的を変更した。

李氏は、中国広東省生まれで1924年にマラヤに渡って錫鉱山経営などで成功を収め、スランゴール・クアラルンプールに於ける戦前の抗日運動の最高指導者だった。「大東亜戦争」中はインド、ビルマにあって中国からの遠征軍の指導に当たった。戦後マラヤに戻って、マラヤ華人公会 (Malayan Chinese Association, MCA, 1949年結成。後、マレーシア華人公会に) で中心的役割を果たし、マレー人党・統一マレー国民組織 (United Malays National Organization, UMNO, 1946年結成) との提携に尽力した。ラーマン (マラヤの初代首相) の下でイギリスとの独立交渉に携わり、マラヤ独立 (1957年) 後の初代大蔵大臣 (いまは「財務大臣」というべきか) に就任した。1946年にはクアラルンプールの親「中国国民党」系紙『中国報』を創刊した。1959年に政界を引退した後、65年には「興業銀行」 (Development and Commercial Bank, 94年、マレー人企業家に買収されRHB銀行に) を創設した。

李氏の死後、長子・李劍橋 (Douglas Lee) 氏の事務所に保管されていた膨大な文書・文献が、昨年詳細な目録とともにISEASに寄贈され、これを機に各国から研究者を招いて李氏の歴史的な役割について初めて総合的な検討を加えようと、この会議が企画された。研究会主催者からは、新たな日程、当方の具体的な割り当て範囲などについて話を聞いた。

ISEAS図書館では、文件名を整理した膨大な目録を、ISEAS Home Page → Library → H. S. Lee Private Archives List (<http://www.iseas.edu.sg/HSLee/Index.htm>) から検索ができると教えてもらった。ただし、外部から検索できるのは文件名までで、文書・文献そのものはISEASに行かないと読むことはできない。ここでは、従来漠然としか知られていない李氏の抗日戦争中のインド、ビルマにおける活動、役割について、具体的な足跡を記す史料を探すことに努めた。その結果、中

華人民共和国側、中華民国側資料からも李氏のこの期の活動を探索する必要がある、と考えるようになった。また、マラヤ華人公会結成初期における李氏の役割と戦前の抗日運動との関連、中国国民党と李氏との関係についても、関連資料を探索した。

マレーシアのペナンでは、研究者と李孝式氏とその役割などについて話し合った後、ちょうど宿泊した日（8月25日）の晩に、マラヤ共産党唯一の女性政治局員・阿焯（伍瑞靄。1922～2000）の回想記（阿焯『走上抗日的道路：馬共中央政治局委員阿焯同志回憶錄』Kuala Lumpur, 21世紀出版社, 2011年）の出版記念会があり、出席した。マラヤの抗日運動・抗日戦争の状況とその中で自身の役割、多数の抗日闘士の具体的な活動などが綴られており、冒頭には最近亡くなった政治局員兼党北マラヤ局書記・阿成（阿海, 单汝洪。1919～2011.3.30）の略伝も記されている。出席者は数十人で、元マラヤ共産党関係者、歴史研究者、社会活動家などだった。マレーシアの左翼運動の歴史、今後の在り方などについて講演と討論が行われた。

会場では主催者の21世紀出版社が関連図書の販売も行い、以下の本を購入した（いずれも同社出版）。

21世紀出版社編輯部 編『深埋心中的秘密：新加坡与檳榔嶼的故事』2008年

同上 編『反殖戰場英魂榜』2010年

金枝芒 遺著『烽火牙拉頂』2011年

クアラルンプールでは、マラヤ大学で歴史研究者から話を聞いた他、27日にあった追悼会への参加、マレーシア華人公会資料室及び華社資料中心での関連資料閲覧（李孝式の抗日戦における役割、中国国民党との関係などについて）、Gerakbudaya社及び市内の書店での関連資料購入を行った。

追悼会は、Gerakbudaya社が去る6月14日に亡くなったシンガポールの弁護士Tan Jing Quee（陳仁貴。1939～2011）氏を偲んで主催したもので、会場には200人ほどが参集して「立ち見」が出るほどだった。陳氏は、マラヤ大学（当時はまだシンガポールにあった）社会主義者クラブ（Socialist Club）の指導者として政治活動を始め、人民行動党にも加わったが、1961年に同党内左派が「マレーシア」結成に反対して社会主義戦線（Barisan Sosialis）を組織すると、同戦線に加入した。リー・クアンユウ（李光耀）政権により1963年に逮捕され3年間投獄された。出所後ロンドンで法律を学び、帰国後は人権弁護士として知られたが、1977年に再び逮捕された。3ヶ月で釈放された後も沈黙を強いられていたが、1990年代後半から、リー・クアンユウ以後も続くシンガポールの強圧的体制に対比する形で、往時の非共産党系社会主義者の立場・主張や、種族の壁を越えた広範な勢力の存在などについて、また、リー

政権が左派を貶めるために行った権謀術策、反撃の許されない人身攻撃などについて、幾多の出版物、研究会などを通じて広く社会に訴えかけるようになった。これが、マレーシア、シンガポールで、政府公認の「正史」を見直す動きに相当大きな影響を与えたと思われる。今年行われたシンガポールの総選挙で野党勢力が予想外の票数、議席数を獲得したこととも関わっているように思われる。

参加者の顔ぶれは、かつての同志 (傅樹楷。Dr. Poh Soo Kai など)、マラヤ労働党 (華人を中心とする左翼政党。1951年結成、72年解党) 元幹部 (陳凱希。Tan Kai Hee)、人民社会党 (マレー人左翼政党。のち「国民公正党」と統合、人民公正党) に元幹部で現上院議員 (Dr. Syed Husin Ali)、マレーシア社会党書記長、同党幹部で6月に逮捕され釈放されたばかりの下院議員 (Dr. Jerakumar Devaraj)、華文教育関係者、元共産党関係者など、きわめて多彩で、華人、インド人、マレー人総てを包摂しており、また、若者の姿も目に付いた。これも歴史見直しの流れの一環だろうとの印象を受けた。

Gerakbudaya 社では、Tan Jing Quee 氏他の編纂した下記の本などを購入した。

*The May 13 Generation*, Petaling Jaya, Strategic Information and Research Development Centre, 2011.

クアラルンプールで入手したマラヤ共産党関係の下記の文献には、当方の論文が再録されていた。再録するとの事前連絡はなかったが、研究論文がより多くの人々に読まれることはそれなりの意義があらうと思った。

1. 21世紀出版社編集部 編『戦前地下闘争時期 (二) : 反法西斯, 援華抗日段階』Kuala Lumpur, 21世紀出版社, 2010年。(『マラヤ華僑と中国』の中国語訳書から第1章第1節を、文末注抜きで再録)

2. 同 編『抗日戦争時期 (一) : 党軍文献集』21世紀出版社, 2010年。(『馬來西亞華人研究学刊』第2期, 1998年12月から再録)。



タン・ジンクイ氏追悼会で挨拶する、  
労働党最後の書記長、タン・カイヒー氏